

総合情報処理センターを目指した苦闘の6年間を振り返って

前情報処理センター長 吉田 博

昭和58年4月から平成元年3月までの6年間にわたり、金沢大学情報処理センター長として、その最大の任務であります総合情報処理センターの設立に向けて、最大限の努力をしまいましたが、その目的を達成できず、去る3月31日をもちまして退任させて頂きました。

金沢大学が学内措置により、金沢大学計算機センターが設置されましたのが昭和45年でありました。その後、昭和52年にはレンタル料として月額500万円が文部省より認められ、中型電子計算機FACOM M-160が導入されました。当時は、広島大学についてレンタル料が認められ、続いて神戸大学、岡山大学にレンタル料が付きまして。しかし、まもなく広島大学、神戸大学、岡山大学と次々に総合情報処理センター化されて行くなかで、昭和58年4月に情報処理センター長の大任を引き受けることになってしまいました。

最初の仕事は、どのようにして広島大学、神戸大学、岡山大学が省令化され、総合情報処理センターとして認められるに至ったかの調査でした。これら3大学の調査団を結成し、旅費は私自身が捻出し、詳細な調査をしまいました。その結果金沢大学では、総合情報処理センター設置のための準備が何等なされていなかったことが明かとなりました。当時の総合情報処理センター設置の条件とは、次のようなものでした。

1. 全学の情報処理の中核としての機能を果たしていること。
2. 計算機実習室が完備しており、教養部からの一貫した情報処理教育が行われていること。
3. 固有のデータベースが構築されており、有効に運用されていること。
4. 教務情報処理などが効果的に行われていること。

これらの条件に少しでも近づくように、それぞれの小委員会を発足させ、工学部および理学部に計算機実習室を設けるとともに、工学部の教務情報処理に着手しました。

また、他大学の情勢を知るために、筑波大学の学術情報処理センター、東京工業大学の総合情報処理センター、千葉大学、岐阜大学、長崎大学、電気通信大学、東京大学生産技術研究所、富山大学などの情報処理センターに機会あるごとに、1度ではなく2度も3度も訪ねました。さらに、文部省の総合情報処理センターに対する考え方および情報を得るために、また、総合情報処理センター設立の陳情を兼ねて、情報図書館課から統廃合後の学術情報課の3代の学術情報係長に至るまで、20～30回も訪ねました。

神戸大学および岡山大学に総合情報処理センターが設置された直後から、行政改革に伴うマイナスシーリングが続き、総合情報処理センターの新設が凍結され、さらに、レンタル料がカットされるに

至り、ますます、総合情報処理センターの要求は困難となってきました。しかし、昭和60年頃になり、文部省でも金沢大学の窮状が次第に理解されはじめ、「総合情報処理センターの設置は、千葉大学、長崎大学、金沢大学の順だと思ふ。」とまで言われるようになりました。その後、その順序が千葉大学、金沢大学、長崎大学と変化し、また、長崎大学の情報処理センター長も「金沢大学より先の総合情報処理センターは考えていない。」とまで言われ、ようやく実現の兆しが見えたに思え、概算要求書の作成に力を入れました。

ところが文部省に行ってみると、千葉大学の総合情報処理センターを、神戸、岡山大学後をはじめて大蔵省に要求したこと、しかし、金沢大学からは要求すらしていないこと、勿論、学長も局長も経理部長からも陳情がないこと、などの話を聞かされました。

その上、「金沢大学では総合情報処理センター設立に対し、学内で不協和音が聞こえる。まず、学内の合意を得た上で、概算要求の順位を上位にしてもってくるように。」とのアドバイスを受けました。

そこで初めて、努力の手順を間違えていたことに気付きました。まず、学内で総合情報処理センターの重要性を理解してもらわねばならない。そのためには、各学部の運営委員を訪ね、重要性を学部長に話してもらうことにし、学長には各部局長およびセンター長連名の総合情報処理センター設立の要望書を提出することにしました。昭和61年3月のことです。

これを契機に、金沢大学将来計画検討委員会の下部機関としての総合情報処理センター構想検討委員会が発足するとともに、「金沢大学計算機センター」が「金沢大学情報処理センター」に名称変更されました。短期間で熱心な検討の末、金沢大学情報処理センター構想が昭和61年12月に答申され、これに基づき、昭和62年4月に概算要求のための「総合情報処理センター設立実務委員会」が発足しました。しかし、昭和63年度の概算要求には間に合わず、情報処理センターからの概算要求となってしまいました。

この間、昭和62年度には千葉大学が、昭和63年度には長崎大学が、昭和64年度には新潟大学と電気通信大学が次々と総合情報処理センターとして省令化されてゆきました。

金沢大学が総合情報処理センター設立実務委員会としての概算要求することが認められたのは、昭和63年3月で、昭和64年度概算要求にたいするものでした。しかし、文部省の担当係長は、新潟大学、電気通信大学とともに金沢大学も一緒に大蔵省にだしたいと言っておられましたが、これも大学での要求順位が低く、大蔵省まで行かないで終わったようです。

一方、電子計算機の使用実績は、この6年間で処理量が4倍、処理件数および利用者数が約2倍と増加し、利用内容も大型化、多様化し、これ対応すべく電子計算機の機種更新も3回行い、その度に校費負担も増額して、なんとか計算需要に追いつこうとしましたが、機種更新前の繁忙期には、中型の計算のターンアラウンドタイムが10日待ちということもしばしばで、1日を争う研究者にとって、この上ない悪条件との戦いとなってしまいました。

情報処理センターの教職員も、少しでも電子計算機の効率的な使用が行なえるように、毎晩遅くま

で努力してくれました。

このように、電子計算機の使用実績、校費負担額などなどの学内努力、総合情報処理センターとしての環境作りからは、金沢大学が神戸大学、岡山大学に次いで総合大学情報処理センターとなる最有力候補になるまでに漕ぎ付けました。しかし、このように、金沢大学が遅れをとった最大の理由は、大学全体が総合情報処理センターに無関心だったことです。これには、総合移転も関わっていたでしょう。しかしそれ以上に、事務当局の無知、無関心があると思います。これについては例を挙げればきりがありませんが、たとえば、前述の「計算機センター」から「情報処理センター」への名称変更もその一つです。レンタル料がついている二十数大学中計算機センターという名称は金沢大学だけだったのです。私自身が文部省の学術情報課長から、計算機センターという名称が文部省にはないこと、総合情報処理センター概算要求のためには早急な名称変更が必要なことを聞かされ、私の方から名称変更を要求する始末です。

また、総合情報処理センターが設置された各大学とも、その要求のための設立準備委員会の委員長は、学長自身が引き受けて積極的に文部省に要求してきています。

この6年間、ただ総合情報処理センターの設置を目標に、朝から晩まで情報処理センターに赴き、研究活動をほとんど停止して努力してきました。しかし、ついにその努力も結ばれませんでした。あとは、後任の優秀なセンター長、運営委員の方々にお願いし、大学を去ることにしました。

恵まれることのない環境で、大学として最も重要な情報処理の中枢を司り、ただひたすら黙々と努力している情報処理センター教職員の方々に對し、何もしてあげられませんでしたことを深くお詫び申し上げます。

長年にわたりご協力下さいました運営委員の先生、多くの難題に對し、その都度解決して下さいました分室長の先生、各小委員長、委員の先生、叱咤激励頂きました多くの方々にたいし、心から感謝いたします。